紹介

中世日本商業史の研究

豐田武著

中世に於ける商業史の研究は、曾て華々しく展開された座の問題の論爭を中心として、幾多の優れた勞作と聽くべき卓見とを學界に投じ、經濟史の部門に重要な寄與をなしてゐることは既に論するまでもないところである。この書の著者はかゝる活潑な學界の動きのうちにあつて、常に新鋭の意氣を以つて多くの論考を送り、その陣營の一方の雄となつてゐたことは衆知するところであるが、こゝに多年研鑽の諸論文を集成して體系を樹て、『中世日本業商史の研究』一卷を成した。世間物騷しく諸事多端の折柄にも拘らず、かゝる事業のなほよく孜々として營まれ、公刊の運びに至つたことは著者の欣懐はもとより斯學の爲めにもまことに慶賀の至りに堪へぬ。

經濟の問題は社會生活の重要關心事であるだけに、史料としての價値ある文獻は夥しく保存されてゐる。所謂古文書の大半はかゝる種類の内容をもつものと稱して過言でなく、諸家の記錄、日記の類も經濟生活を筆にすること極めて多い。著者はこの様な文獻の蒐集を利用し得る位置にあること多年、豐富に採錄された史料を綿密に整理して本書の骨骼を立て、加ふるに犀利な史觀を以つて統一を成した。莫大な史料を連ねる論考は往々にして通讀の煩ひとなり易いものであるが、本書の如きはその感なく、一讀して興趣盡くることなく、中世社會の經濟相はよく國史の立場に於いて把握されてゐることを想へば、著者の苦心は察すべく且つは力量に敬服せざるを得ない。

本書の構成は目次の示すところ次の如くである。

第一章　中世の產業界。第一節　產業發達の概觀、第二節　金屬工業、1刀鍛冶、2鑄業物。

第二章　地方定期市場の發達。第一節　庄園内の市場、第二節　定期市場網の確立。

第三章　都市商業の勃興。第一節　特殊市場の成立、1米穀市場　2海產物集散市場、3家畜市場、第二節　問丸の發達、第三節　爲替取引の發生、第四節　中世都市論。

第四章　近世的商業への轉換。第一節　領國經濟の成立　第二節　商品流通の躍進、1貨幣及度量衡の統一、2關稅障壁の撤廢、3樂市樂座の運動、第三節　商業統制、第四節　近世的大商人の誕生、1御用商人、2貿易商人。

右に掲げた章節の示すところによつて我が中世の商業の全貌は盡して餘すところなく說かれてゐることは言ふまでもないが、その内容に就いて聊か略敍すれば、先づ第一章には莊園村落の生產機構に筆を起し、生產物資の商品化する事情を明かにして、農業、手工業及び原始諸產業の諸部門に亙つて夥しい產物の名稱を掲げ、各地の名產として著れた品を詳かに載せてゐる。殊にそれらの物產のうちから金屬工業に就いて、代表的に取上げて、鐵鑛

の產地とその原料鐵の流通の狀態を察し、莊園內に於ける鍛冶工、鑄物師の活動を述べ、又刀工、鑄物師等の分布情況を精細に表示してゐる。

次いでこれらの商品交易の機關としての市場を論じ、貨幣が年貢の代錢納付の形式により漸く弘通しつゝあつた狀態と平行して、莊園內に一般に市場が定置されて行く事情を表示しつゝ、具體的に各地の市場の名稱、設置場所の條件、開市時日、市場商人、ならびに取引の實情等に就いて解明し、更にその定期市場として、擴大しつゝあつた大名領主の保護の下に、發展して行つた過程を小田原北條氏支配下の南關東の場合に就いて明細に見、併せて市場に關する法制の成立その內容の分析を試みた。

第三にはかくして漸次に定設整備された市場は、市場網の擴大に伴つて御賣的傾向を帶び、商品の單純化を來して、特殊市場が都市商業の核心として成立したことを指摘し、京都に於ける兩米場米座の穀物市場、粟津供御人の鹽座、淀・山崎等の魚市による海產物の配給、並びに五條室町・鳥羽の馬市をはじめ各地大名領內の家畜市場の經營を說き、卸商・小賣商の交易による特殊市場の隆昌を述べた。これと共に都市商業には問丸の發達が見られるとし、その發生より論じ、莊園經濟より獨立して物資運送仲介業者として都市、港津に據つて取引を擴げ、交通機關を利して各地割據の市場圈を打破つて物資の流通交換を圓滑ならしめた狀況を詳しく述べ、殊に京都に於ける取扱品目を例にとつて敍述した。これらの商業活動を助成したものは爲替手形の弘通であるから、次にこれを取上げて、年貢の運送・貨幣流通にこれが次第に利用範圍を擴げ、京都はじめ各地に替屋などの取扱業者の成立したことを說いた。以上の商業活動は都市商業の核心であつたから、その盛行は各地に都市の興隆を見る。新に港町、城下町の成立と古き都市の變貌とを併せて論じ、「商工業の所在地にして、外部より不斷の食料品移入を必要とする一地區」と定義して、その人口、構成、自治機構等に就いて各論してゐる。

最後に封鎖的な割據經營の中世的商業が次第に發展して近世的相貌を現すに至つた過程を述べ、大名領國の經濟組織がその城下と支城・宿驛との機構の下に整備され、國內の交通障壁の撤廢、度量衡の統一、他領との交通制限乃至禁止の政策に導かれて成立したことを見、これを契機として益々發展し、天下統一の實現に誘はれて飛躍的に擴大したことを論じ、貨幣及び度量衡の統一の强化、關稅の撤廢、樂市樂座の政策が執られたことをその主たる理由に擧げてゐる。かくて新しい封建制の再組織の過程のうちに都市商人の富力は支配者の權力の地盤となり、その保護と統制の下にあつて町人の身分を確立し、大資本を擁する御用商人を生み、一方には角倉・末吉・角屋等の海外交易を營む貿易商人を出すに至つたのであるとした。

右に述べるところ皮相を撫して、著者の眞骨頂を傷けるところあるを恐れるが、敢て概觀を試みた所以は、現下の書物入手難によつて新刊の弘通せぬ實情に鑑みるところあるによるものである。かゝる不自然な狀態はなほ永く續くとは思はぬ、近く打破される

ことを確く信じてゐるが、それまでにはなほ少時の困難を堪へねばならぬ。その間同學諸賢の高說勞作に啓發される機會は乏しくなるであらうが、著者のいよ〳〵精進加餐を願ひ、併せて同學諸賢の自重をも冀ふ次第である。（A5版、三八六頁、昭和十九年八月、岩波書店刊、價六・〇〇）（平山敏治郎）。

昭和十五・十六年度東洋史研究文獻類目

東方文化研究所編

この類目は昭和十年七月第一册を出した同研究所編の『東洋史研究文獻類目』の第六册に相當るもので、收むる所表記の二年間に於ける日本・支那・歐米に亙る關係文獻を類聚してゐる。從つてその體裁は既刊のものと大差ないのであるが、併し本册からは從來單に書評のみを載せたに過ぎない單行本をば新たに收錄して、通じての文獻目錄たるに至つたのは注記すべきであるし、なほまた卷首に同研究所員が分擔執筆した學界展望を載せたことも精粗必ずしも一でないが、一般利用者に便益を與へるものとして、編者のこの種類目の編纂に對する熱意がそれ等から充分に認められる次第である。

今度の戰の急迫化に伴うて、出版文獻の入手に困難を伴ひ、それは支那・歐米をも含めた本文獻類目に於いて殊に大きいことであらう。從つてうちに遺漏のあることは免れ得ないし、また印刷も容易でなく、引いて是等から本册の出版期日が遲延したと考へられるが、全般の研究を進める上に重要な役立ちをするこの事業、而も一面に於いて兎角型にはまり勝な面を持つ文獻類目の作製に於いて、本書の如く册を重ねて內容の充實に意を用ゐられてゐるのは我が東洋史界の爲に慶賀すべきである。公的な研究所の事業として今後もその續刊が當然期待せらる。本類目に先立つて公刊された筑波家國史研究部の年々の『國史學界』が同樣引續いて印行されてゐるのはよろこばしい事であるが、たゞ同書は當初の內容の整ふたに較べて、年々形式に墮して行つて、內容に遺漏の多いものとなる傾向の見受けられることや、前年來出版の文獻目錄の類がやゝもすれば糊と鋏で作られた機械的なものゝ多いのを思ふにつけ、本書は一つの籠を與へるものであり引いて改めて紹介することにした次第である。（B5版、二八〇頁、京都印書館發行、定價㊟拾圓）（梅原末治）。

南海に關する支那史料

石田幹之助著

近時一般東洋學の目覺ましき發達に伴ひ、南海史の研究も長足の進步を遂げ、その南海諸地域に政治的・經濟的・宗教的關係を有する歐米諸國學者の研究成績には見るべきものがある。我が國に於ても大正初年以降、故藤田豐八博士を始め、少數乍ら優れた學者により研究がものされ、夫々專門學術雜誌に揭載されたことは周知の通りである。併し乍ら元來この地域が東洋文化の中心地からかけ離れてゐる關係から、南海史については一般に關係が薄く、從つてその研究は東洋史の他の部分に比べて立遲れの狀態に